THE NATIONAL ART CENTER, TOKYO NEWS

国立新美術館ニュース

NO. 23
AUG. 2012

THE NATIONAL ART CENTER, TOKYO 5TH ANNIVERSARY

嶋本昭三《作品》1954年　塗料・新聞紙　芦屋市立美術博物館
SHIMAMOTO Shozo, *Work*, 1954, Paint on newspaper, Ashiya City Museum of Art & History

「『具体』――ニッポンの前衛 18年の軌跡」展関連シンポジウム

「『具体』再評価の過去と現在」抄録

はじめに

「『具体』――ニッポンの前衛 18年の軌跡」展に関連し、2012年7月14日（土）、国立新美術館3階講堂で「『具体』再評価の過去と現在」と題するシンポジウムが開催された。本シンポジウムは、1972年に解散してから40年間、「具体」がどのように評価されてきたのか、そして、現在どのように評価されているのか、さらに、これからの「具体」研究の課題や視点を浮き彫りにすることを目的とし、これまで「具体」関連の展覧会を企画してきたキュレーターや研究者らを国内外から迎え（マテイヤス・フィッサー氏はインターネット電話での参加）、「具体」の再評価という観点からの講演とディスカッションが行われた。以下、各講演の内容を簡単に紹介する。

平井章一「本シンポジウムの趣旨と『具体』再評価史の概観」

「『具体』――ニッポンの前衛 18年の軌跡」展の企画者である平井章一（国立新美術館主任研究員）が、シンポジウムの開催の趣旨とともに、これまでの「具体」回顧展を振り返りながら、今回のパネラー招聘の意図を説明した。

「具体」解散後の最初の回顧展は、1976年に大阪府民ギャラリーで開催された「具体美術の18年展」であった。この展覧会は、「具体」の元会員を中心にした実行委員会によるもので、展覧会に合わせて刊行された『具体美術の18年展』は、1980年代に「具体」の研究が本格的に始まるまで、「具体」に関する唯一のまとまった資料であった。

1979年に兵庫県立近代美術館（現兵庫県立美術館）で「吉原治良と具体とその後」展が開かれたが、これは吉原の作品と共に1979年当時の「具体」元会員による作品に焦点を当てたものであり、「具体」の活動期の作品を紹介するというものではなかった。その後、萬木康博氏の企画によって1981年に東京都美術館で「1950年代―その暗黒と光芒」展が開催され、ここにおいて「具体」が戦後美術史の中において重要な美術運動であったことが位置づけられた。1991年に芦屋市立美術博物館が開館し、当時、同館の学芸課長であった河崎晃一氏を中心に、1992年に同館で「具体Ⅰ－1954～1958」展が、芦屋公園で「蘇る野外展」が開催され、その翌年には「具体Ⅱ－1959～1965」展と「具体Ⅲ－1965～1972」展が開催された。また、この時出版されたカタログや資料集が、その後の「具体」研究の基盤となった。1990年代後半以降、「具体」の元会員の個展が美術館レベルで開かれるようになったことも重要な動きといえる。そして、2004年に兵庫県立美術館で開かれた「結成50周年記念『具体』回顧展」において、後期を含む「具体」の18年間の活動の流れが一堂に紹介された。

国内での「具体」関連の展覧会が1980年代以降様々な形で開かれた一方で、1983年にはデュッセルドルフで、そして1985年にはオックスフォードで「具体」を取り上げる展覧会が開かれるなど、海外での「具体」への関心も1980年代から展覧会を通じて高まっていった。特に、1986年にパリの国立近代美術館で開かれた「前衛の日本1910－1970」展は、ヨーロッパでの「具体」の再評価に決定的な影響を与えた。

ここ数年、ヨーロッパでは再び「具体」関連の展覧会が活発に開かれている。それらは、ゼロ財団のマテイヤス・フィッサー氏の企画で、2009年のヴェネチア・ビエンナーレでは「具体」の特集展示が、2010年にはルガーノの州立美術館で「『具体』―時間と空間の絵画」展が開かれた。さらには、2006年にデュッセルドルフのクンスト・パラスト美術館で開催された「ゼロ：国際的な作家たち－1950年代／60年代の前衛」展や2011年にスキーダム市立美術館で開催された「Nul=0.―国際的文脈におけるオランダの前衛1961－1966」展では、「具体」と同時代のヨーロッパの前衛美術運動との直接的な関わりが取り上げられている。

一方北米では、1990年代から「具体」の調査をしている美術史家のミン・ティアンポ氏が「具体」関連の展覧会を企画している。ティアンポ氏は、2009年にニューヨークのポロック＝クラズナー・ハウス・アンド・スタディ・センターで開かれた「互いに魅せられて－『具体』とニューヨーク」展を企画し、また2013年にニューヨークのグッゲンハイム美術館で開催予定の「『具体』：素晴らしい遊び場」展の共同キュレーターをも務める予定で、「具体」がいかにして国際的なアートシーンに介入したのかという視点から、アメリカを中心に「具体」を紹介するため、積極的な活動を行っている。

萬木康博「展覧会『1950年代――その暗黒と光芒』企画の狙いは何だったのか」

「具体」が解散した1972年3月以後、最も早く東京でその運動の重要性も織り込んだ「1950年代―その暗黒と光芒」展を企画した萬木康博氏が、1981年に同展を開催した背景と、「具体」の作家の作品購入をめぐる当時の状況などについて説明した。

東京都美術館で開催された「1950年代――その暗黒と光芒」展は、1980年という「今現在」の、日本美術の中核を担っている生身の作家たちに照準を合わせ、その基底に正面から向き合おうとした展覧会だった。私は同展カタログのテキストに「1950年代に20～30歳代だった作家、あるいは作家活動を開始しようとしていた部分が、いま日本の美術界の中核を形成している……。それならば、いま1950年代を再検討することは、現代日本美術の中核部分について、その出発点＝基底を確認するという作業……に他ならない」と記している。

「具体」については、代表の吉原治良（49）をはじめとし、初期のメンバーから、嶋本昭三（26）、吉田稔郎（26）、吉原通雄（21）、白髪一雄（30）、村上三郎（29）、田中敦子（22）、金山明（30）、元永定正（32）の9人、計20点（総点数186の約11％）の作品を展示した（作家カッコ内は1954年当時の年齢）。

1975年秋、開館50周年を機に新たに建て替えられ再出発した東京都美術館は、このとき初めて学芸部門をもった。学芸員の企画による最初の展覧会が1976年春に開催した「戦前の前衛展」であり、さらに1977年末開催の「靉光・松本俊介そして戦後美術の出発」展がそれに続いた。

「前衛展」で「大正初期から敗戦までの俯瞰」を目指し、「出発」展では1930年頃から1952

年辺りの作品までを包含した。「1950年代」展は、これらに続く展覧会として準備され、1960年代、さらに1970年以降の美術の状況を検証するシリーズに繋げる意図もあった。

学芸部門を初めて設けた東京都美術館の作品収集方針は、当時、他の美術館がまだ本格的にコレクションの対象としていなかった日本の1945年以降の美術作品を重視して特色を打ち出す、という合意に基づいていた。特別展の企画内容は幅をもたせていたが、収集方針と連動した企画は自ずと柱になった。

「1950年代」展に展示した「具体」作品20点の内、同展開催の1981年時点で既に吉原治良、白髪、元永の各1点（吉原の《作品（無題）》との出会いは特に鮮烈だった）が、東京都美術館のコレクションとなっていた。こうした作品の購入が実現した背景として、海外に流出した「具体」作品の買い戻しを始めていた画廊の動きも挙げられ、同展の後、前記の収集方針により東京都美術館は嶋本、田中、白髪、金山、村上の諸作品も購入した。その後も寄贈、購入が続き、それらは、現在の東京都現代美術館のコレクションとして受け継がれている。

今回の「『具体』――ニッポンの前衛 18年の軌跡」展図録掲載のテキストで、「当時の吉原と同世代の……人たちが」共有していた「戦後日本の再建に向けたある種の使命感」が原動力となって、「戦争によって封印された近代精神の復興」と「自由の場における創造」という「“近代精神の理想郷”を目指した実践」、それが「具体」だった……とする平井氏の視点は、首肯できる。

河﨑晃一「具体、芦屋からの発信」

1989年から芦屋市立美術博物館に学芸員として勤務し、3度に亘る「具体」回顧展の開催や『具体資料集』の編纂に尽力した河﨑晃一氏が、「具体」研究において芦屋市立美術博物館が果たした役割についての報告を行った。

芦屋市立美術博物館を擁する芦屋市は、大阪市、神戸市の間の阪神間に位置し、明治時代の後半から発展してきた場所である。同館が設立された当時は、美術館が各地で相次いで開館し、活発に地元作家の作品を収集し展覧会を開くことによって、地域文化の振興に寄与していた時代だった。芦屋市立美術博物館でも、開館当初から小出楢重、中山岩太や芦屋カメラクラブの作品といった芦屋にゆかりのある作家の作品を収集し、展覧会活動を行っていた。こうした活動の一環として、吉原治良や「具体」の作品や資料の収集、そして展覧会が企画されたのであった。

1990年代初頭まで、国内の美術館で「具体」の作品が紹介されることはあったものの、その実態は未だ十分に知られていなかった。その一方で、1986年にパリの国立近代美術館で開かれた「前衛の日本1910−1970」展において「具体」が大きく取り上げられ、日本国内でも海外での「具体」への高い評価が注目を集めた。そのため、1990年代初頭まで、「具体」は「神話」として語られるという傾向が強くあった。

そこで、芦屋市立美術博物館は「具体」の実態を把握するべく、本格的な調査を開始する。1976年の「具体美術の18年展」のカタログに掲載された記録写真は、当時大阪府立現代美術センターに保管されていたため、そこにあったドキュメント写真をもとに資料集を作る計画が「具体」回顧展の企画と共に進められた。そして、1992年から1993年に3回にわたって開催された展覧会のカタログ『具体Ⅰ』、『具体Ⅱ』、『具体Ⅲ』を発行し、その後、それらカタログに対する作家からの反応や継続して行われていた調査の結果を盛り込んで『具体資料集』を出版したのであった。

芦屋市立美術博物館では、「具体」の回顧展以降「具体」の元会員の作家たちの個展も企画され、「具体」の活動を包括的に紹介することが同館の大きな目的となっていった。また、1994年に吉原治良旧蔵の膨大な資料を預かったことをきっかけに、芦屋市立美術博物館は吉原および「具体」研究の重要な拠点となり、「具体」の研究を広めることが館の重要な活動として位置づけられた。「具体」の作家たちが吉原治良に初めて認められた作品を集める、という収集方針のもと、「具体」の作品収集も継続的に行われていった。

こうして「具体」の実態を明らかにし、広くその活動を知ってもらうために活動した芦屋市立美術博物館だったが、そこにあった膨大な資料の大半は、現在、大阪大学総合学術博物館に一時的に保管されている。今後、公立の美術館などで、「具体」の資料が広く公開されることが望まれる。

ミン・ティアンポ「互いに魅せられて：『具体』とアメリカ」

1990年代から「具体」の研究に取り組み、「具体」についての論文を多数発表し、また、近年では北米で「具体」関連の展覧会を企画しているミン・ティアンポ氏が、「具体」とアメリカの関係史を辿りつつ、来年グッゲンハイム美術館で開催予定の「『具体』：素晴らしい遊び場」展で示す新たな視点について説明した。

「具体」とアメリカとのつながりは、吉原治良が雑誌『墨美』において、『ライフ』誌に掲載されたジャクソン・ポロックの写真に言及したことにまで遡ることができる。雑誌を通してポロックの作品に触れていた吉原は、自ら雑誌を出版し、そこに作品図版を掲載すれば、世界中に自らの活動を宣伝できると考えた。そこで「具体」は、『具体』誌を発行して海外の美術関係者に向けて発送し、国際的なネットワークを築いたのであった。

1958年にニューヨークのマーサ・ジャクソン画廊で開催された「具体」展は、「具体」にとって初めての海外での展覧会であった。この展覧会は成功を収めたとは言いがたいものではあったが、アメリカでの「具体」評価については、既に1957年の『ニューヨーク・タイムズ』誌上においてレイ・フォークが「具体」の野外展についてレポートをしており、そのレポートを後に手に入れたアラン・カプローが1965年に出版した著書、『アッサンブラージュ・エンヴァイロメンツ・アンド・ハプニングス』で「具体」の活動を写真付きで大きく扱ったことで、「具体」はアメリカで広く認知されるようになった。また、1960年代後半以降、複数の美術館で「具体」の作家の作品が紹介されていった。

上述のカプローの著書は、「具体」のアメリカでの受容史において重要な位置を占める資料であり、ここでは「具体」のパフォーマンス

の活動に焦点が当てられた。一方ヨーロッパでは、批評家で画商のミシェル・タピエの活動によって1950年代後半から「具体」は広く知られるようになってはいたが、タピエは自身が唱える「アンフォルメル」の概念に沿う形で「具体」を紹介したため、ヨーロッパでは長きに亘って「具体」は「アンフォルメルのグループ」と見なされることになった。

1990年代に入り、アメリカの美術館で「具体」の活動が紹介されるようになると、「具体」はカプローが強調した「パフォーマンスのグループ」として認識されるようになっていく。それと同時に、タピエとの接触後「具体」が絵画制作に重点を置くようになったことから、アメリカではタピエに対する批判的な意見が現れるようになる。それ故、アメリカ、ヨーロッパ、そして日本においても、1990年代以降「具体」は「パフォーマンスのグループ」なのか、「アンフォルメルのグループ」なのかという議論が巻き起こった。そして、いずれの見方にせよ、1990年代までは「欧米の前衛芸術運動の日本版」という認識の中で「具体」は捉えられていったのである。

こうした海外での「具体」再評価は、欧米中心の視点から「具体」を捉えようとするものであり、その視点を修正すべく、私は新たなアプローチを導入したいと考えている。一つ目のアプローチとして、「具体」の活動期を前期、中期、後期と3つに区切るのではなく、1962年のグタイピナコテカの設立以前を第一段階とし、グタイピナコテカ設立後を第二段階として捉える。この新しい時代区分により、「具体」が自らの戦略によって国際的なネットワークを築いたことが明瞭になり、また、従来の時代区分ではタピエとの出会いが強調されすぎているため、そうした見方を修正することができる。そして、二つ目のアプローチとして、「具体」がコンセプチュアルアートや環境芸術など、国際的な水準から見ても20世紀の新しい芸術表現に非常に早く取り組んでいたことを踏まえ、「具体」の芸術活動の分類区分を細分化することを提案する。これにより「具体」の独自性と革新性をより明確に示すことが出来るのである。2013年にグッゲンハイム美術館で開催予定の「『具体』：素晴らしい遊び場」展では、以上の観点をもとにして展覧会を構成したいと考えている。

マテイヤス・フィッサー「コミュニケーション不全」

近年ヨーロッパで「具体」関連の展覧会を積極的に企画しているマテイヤス・フィッサー氏が、「具体」とオランダの「ヌル」やドイツの「ゼロ」との関わりに触れながら、とりわけ、ヨーロッパのそうした運動に関わっていたイヴ・クラインが「具体」をどのように捉えていたのかに焦点を当てた報告をした。

ヨーロッパにおいて数年前まで、「具体」は、アンフォルメル風の絵画作品によって知られた存在であった。しかし、2006年に私が企画した「ゼロ：国際的な作家たちー1950年代／60年代の前衛」展では、「具体」の作品の中から時間や空間を取り込んだインスタレーションや環境芸術を紹介し、このグループに対する新たな関心を呼び起こした。

「具体」は、1960年代に入るとルーチョ・フォンタナ、イヴ・クライン、「ゼロ」のハインツ・マックそして「ヌル」のヘンク・ペーテルスといった第二次世界大戦後のアートシーンで実験的な作品を発表していた作家たちと、密接な関係を持つようになっていた。

そもそも「ヌル」のペーテルスが初めて「具体」の存在を耳にしたのは、日本での滞在経験をもつイヴ・クラインを通じてであったという。しかし、クラインは、日本の前衛美術についてよく知っていたにもかかわらず、「具体」についてはあまり詳しくはないと語っていた。また、クラインは吉原治良から送られた『具体』誌を所有していたものの、自分の作品と「具体」の作品との類似に苛立ちを感じており、『具体』誌を売ろうとすら考えていたのである。

クラインの苛立ちは他の場面でも見られた。1961年にクラインがニューヨークのレオ・キャステリ画廊での個展を開いた際に、記者たちから日本での経験について質問を受けたり、「具体」と自作との類似性について訊かれたりすると、不快な表情を示した。また、当時はマーサ・ジャクソン画廊での「具体」展に加え、「具体」以外の日本人作家の展覧会がしばしば開かれるようになっていた。こうした状況の中、クラインは、「15年前には、私の芸術の影響が世界中の若いアーティストに見られることを説明する必要性を感じるときが来るなんて思いも寄らなかった」と述べ、自らを非物質性、火、水、建築や音楽などを芸術的営為に結びつけた最初のアーティストであると示し、身体を使った芸術表現は自身の発明であると主張したのであった。

クラインから「具体」について耳にしていたペーテルスは、その後『日本における連続性と前衛』掲載の図版によって初期「具体」の野外展の出品作を知り、「具体」を自らの企画する展覧会に招待することを決意する。

そして、クラインの死後、「具体」は「ヌル1965」展に参加する機会を得る。当初、吉原はアムステルダムでもアンフォルメル風の絵画を展示しようと考えていたが、そうした絵画作品はペーテルスの期待を裏切るものであった。そこで、吉原は光や時間、水や空気などを用いた初期作品の再制作を決断し、ペーテルスはクラインを含むヨーロッパの作家たちの近作と「具体」の初期作品との類似性を認め、金山明とクラインの作品を並置して展示したのであった。

後にペーテルスが語ったところによると、クラインは生前自らが関係していた「ヌル」展に「具体」が参加することに反対していたという。クラインは、西洋の作家が日本の作家に影響を受けていると思われることを危惧していたのである。こうした事例が示すように、「具体」は西洋の同時代の作家たちにとって、恐れられる存在でもあったのである。

むすびにかえて

本シンポジウムでは、限られた範囲ではあったものの、これまでの「具体」研究の一端が明らかになると同時に、現在の研究の視点や今後の課題が浮き彫りになった。また、本稿では省略したが、講演後のディスカッションでは講演を元にして活発な議論が交わされ、「具体」研究の今後の可能性が提示された。

編集：山田由佳子（やまだゆかこ　任期付研究員）

研究員レポート

国立新美術館の情報検索サービスの展開──展覧会情報と書誌情報のリンク

「人と情報をつなぎ、文化遺産としての資料を収集・公開する美術館」……国立新美術館の情報収集・提供事業（リンク①）のコンセプトである。「人と情報をつなぐ」ということは、単に美術資料情報や展覧会情報といった美術情報を収集・蓄積するだけでは実現できるものではない。国立新美術館は展覧会カタログを約8万5千冊、展覧会情報を約5万6千件、収蔵・蓄積している。このように大量の情報から、検索結果としての限られた情報にアクセスできるようにすることが、人と情報を「つなぐ」ということになるであろうか。検索結果を単に表示する以上の、より積極的に情報を利用してもらいやすい検索サービスの構築が必要ではないかと考えている。

国立新美術館では、展覧会情報の検索サービスである「アートコモンズ」（リンク②）と美術図書資料をはじめ展覧会カタログや出品目録、展覧会に関連して開催された講演会記録（のうち、館内での公開許諾が得られたもの）等が検索可能な蔵書検索システム（以下、OPAC, リンク③）を提供している。この2つは独立したサービスであり、展覧会情報を検索し、その結果の展覧会のカタログの情報を得る場合にはそれぞれのサービスで（検索結果からキーワードをコピー＆ペーストしたりしながら）検索する必要がある。一方、「アートコモンズ」では外部の検索サービスとの連携の試みとして、Webcat Plus（リンク④）を用いて展覧会タイトルをキーワードとして展覧会に関連する図書情報を検索するリンクを設けている。Webcat Plusの連想検索機能により大量の図書情報を得ることができるが、各資料の所在などは資料個別に検索しなければならず、実際の資料を閲覧することまで考えると、若干敷居が高い印象である。

そこで、国立新美術館が所蔵する資料に限ってということにはなるが、展覧会情報から展覧会カタログの書誌情報を得て、さらに資料の所在の情報につなぎ、そこから実際に国立新美術館アートライブラリに来室すれば資料の実物が閲覧できるという流れを作ること、これが新しい検索サービス実現のポイントである。

新しい検索サービスでは、展覧会情報と展覧会カタログを一対一で結びつけたり、ある会場（美術館）で開催された展覧会のカタログを一覧したり、展覧会タイトル（の一部）で展覧会を検索し、それらのカタログや講演会記録を調べたり……、いろいろな条件づけから得られた展覧会情報を起点として、さまざまな展覧会や関連するカタログ、出品目録等の情報を連鎖的に得ることができるようにしたいと考えている。

また、OPACでは「件名」という資料の主題を示すキーワードから、同一主題を持つ書誌情報へリンクする機能がある。しかし、そのリンクは資料のカテゴリ（例えば、展覧会カタログから成る資料群）で閉じており、ほかのカテゴリの資料にリンクされない。例えば、展覧会カタログの情報から同じ展覧会の講演会記録に直接リンクはされないのである。講演会記録は（カタログではないので）図書として登録されており、資料として属するカテゴリが異なるので、仮に展覧会カタログとは同じ主題を持っていたとしてもリンクされないのである。もちろん、検索結果の一覧にいったん戻って、それぞれの書誌情報を見ることはできるが、同じ展覧会の資料として一覧できた方が利便性が高いといえよう。新たに構築する検索サービスでは、このように現状の検索サービスが不得手としている部分をより使いやすい形で提供することを検討している。

ここまで述べたような検索サービスを実現するためには、展覧会情報と書誌情報とを同じ展覧会同士で結びつける必要があるが、展覧会情報（タイトル、会期、会場、概要、関連イベント情報、会場住所、交通案内等）と書誌情報（タイトル、著者情報、形態、刊年、注記等）というように情報を構成する項目が大きく異なる2つのデータベースを結びつけるためには、多少の工夫が必要となる。展覧会のタイトルとカタログの書誌情報としてのタイトル（書名）は共通の項目であるが、タイトルだけで同一の展覧会に関する展覧会情報と書誌情報であるということを保証するには弱い。同一性を強めるためには、タイトルに加え、会期や会場という情報と組み合わせる必要がある。会期および会場は書誌情報上では項目として（検索サービスから利用しやすいかという意味で）独立した形では用意されていない。これらは書誌情報中の「注記」という項目に「会期・会場」というようにまとめて記述されており、その記述ルールにはいくつかのパターンが見受けられる。展覧会情報と書誌情報との結びつけを効率よく実現するためには、あらかじめ「注記」から会期や会場をシステム的に扱いやすいように切り出しておくことが必要である。（この種の処理は書誌情報が更新されるごとに、切り出しの処理も自動的に行うようにしておく必要がある。）

紙数の関係で詳細は述べないが、2つの情報サービスにわかれて存在する情報を結びつけていく背景には、情報から語句を取り出す「形態素解析」や語句や表記の違い、同義語の統一（または同一視）のための形式的な知識表現（AはBに等しい等）といった情報工学的な要素も存在する。

1つのキーワードから展覧会情報を見つけ、そこから展覧会カタログ等の資料情報につながっていく、このような情報の連鎖をスムーズに行き来できる検索サービスの構築により、利用者と情報がより幅広くつながり、さらに国立新美術館が所蔵する美術資料群への利用につながっていくことが期待される。

本稿で述べたサービスは平成24年度末には試験公開の予定である。

室屋泰三（むろやたいぞう　情報資料室長）

参考リンク
① 国立新美術館ホームページ「美術館のご紹介」: http://www.nact.jp/concept/index.html
② アートコモンズ: http://ac.nact.jp
③ 国立新美術館蔵書検索（OPAC）: http://opac.nact.jp/mylimedio/search/search-input.do
④ Webcat Plus: http://webcatplus.nii.ac.jp

書架のあいだから　特別資料閲覧のご案内

〈「別館」をご存じですか？〉

国立新美術館の3階にあるアートライブラリーでは、国内外で開催された展覧会のカタログのほか、近現代美術、建築、写真、メディアアートなどに関する図書や雑誌を所蔵しており、無料でどなたでもご覧いただけます。資料の多くは閉架書庫に入っており、蔵書検索（OPAC）でお探しのものが見つかれば、カウンターで請求していただきスタッフがお持ちする仕組みになっています。最新の展覧会カタログや新刊の図書・雑誌など比較的新しい資料の多くは開架に置かれており、すぐにお手にとってご覧いただけます。ライブラリーをご利用いただいている皆さまの中には、これらを楽しみにしておられる方もいらっしゃるかもしれません。

アートライブラリーが所蔵している美術資料は、3階の開架と閉架書庫にあるものがすべてではありません。1969年以前に発行された展覧会カタログや終刊した雑誌、各美術館・博物館などの紀要年報類、貴重または脆弱な資料は「別館」の書庫に保管されています。別館がどこにあるかご存じでしょうか。六本木駅側の正面入口から美術館の本館の建物を見た場合、左手（政策研究大学院大学側）にある3階建ての小さな建物です。ここに保管されている資料は、「特別資料閲覧」というサービスでご覧いただけます。

特別資料閲覧は、国立新美術館の開館から1年後の2008年1月に開設されて以来、徐々に利用者数を増やし、2011年度には40名を超える方にご利用いただいています。開室時間は木曜日と金曜日の午後1時から5時で、事前の予約が必要となりますが、閲覧を希望される資料と閲覧の目的が明らかであればどなたでもご利用いただけます。

〈特別資料閲覧で見られる資料〉

特別資料閲覧で利用できる資料には、美術雑誌の創刊号や百年以上前の画集、有名な作品が初めて世に出た時の展覧会カタログなど普段なかなか手に取ることのできないものも多く含まれます。それらの貴重な資料は、いろいろな発見をもたらしてくれます。たとえば1907年10月に開催された文部省美術展覧会（文展）の第一回の図録を見ると、上村松園、菱田春草、岡田三郎助、黒田清輝、和田三造など日本の近代美術の巨匠たちの名前がずらりと並んでいます（『文部省美術展覧會圖録』審美書院、1907年）。また、明治美術会から太平洋画会を立ち上げた画家の一人である吉田博が出版した、スペインのアルハンブラ宮殿を訪れた際のスケッチや紀行文などを集めた本には、森林太郎（森鴎外）が序文を寄せています（『魔宮殿見聞記：寫生旅行』博文館、1910年）。

このような情報はインターネットで調べればすぐに分かることかもしれません。しかし、実際に発行された資料を手にとり、当時の人々がそれをどのように見、感じたかということに思いを馳せてみるのも、美術の楽しみ方のひとつではないでしょうか。

〈予約のしかた〉

OPACでお探しの資料を検索していただいたときに「予約閲覧」と表示される資料が特別資料閲覧の対象となります。OPACの検索結果画面に表示されている「所在」欄の「国新美別館○○」の部分をクリックしていただくと、申し込み画面にジャンプします。表示に従って必要事項を入力していくと予約完了となります。資料を準備する関係で、閲覧希望日の5日前までのご予約をお願いしています。当日は担当のスタッフが資料を用意してお待ちしておりますので、ご予約いただいた時間に直接別館1階までお越し下さい。

〈貴重な資料の保存〉

当館で所蔵している資料の中には、刊行から長い時間を経て状態の悪くなってしまったもの、たとえば表紙がとれているもの、破れているもの、とじ紐がちぎれてばらばらの状態になっているものなども含まれます。そのような資料に手を加えて形を変えてしまうことで、資料が本来持っていた特徴や歴史的な経緯を損なってしまう可能性を考慮し、敢えて修復などを施さない場合もあります。私たちが重点を置いているのは、書庫を安全かつ清潔な環境に保ち、資料の形状や状態に応じた保存容器を整える取り組みを進めることです。そうすることで状態の悪い資料の劣化の進行を遅らせ、更なる破損の可能性を低くすることができると考えています。

貴重な資料のオリジナル性を保護することは、私たちの大事な仕事のひとつです。資料によっては閲覧に際して手袋の着用などをお願いすることがありますが、ご理解をいただければ幸いです。

特別資料閲覧についての詳しい情報、申し込み方法などについてはホームページ※をご覧いただくか、アートライブラリーのカウンターまでお気軽にお問い合わせ下さい。皆さまのご利用をお待ちしております。

小幡朋子（おばたともこ　研究補佐員）

※ http://www.nact.jp/art-library/tokubetsu-etsuran/index.html

木内祐子（きのうちゆうこ　研究補佐員）

アーティスト・ワークショップ

息をとめて　そっとさわって
銀箔から学ぶ日本の画材

講師：神戸智行（日本画家）
2012年5月27日（日）13:00-16:30
国立新美術館　別館3階多目的ルーム他

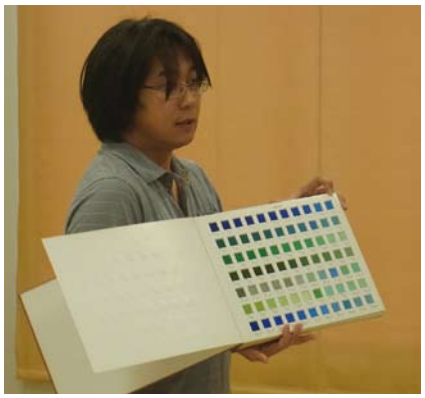
さわやかな風が気持ちよい5月の日曜日、日本画家の神戸智行（かんべともゆき）さんを講師に迎えて、日本画の素材について学び、銀箔貼りと加工を体験するワークショップを開催しました。

参加者は、小学生から70代まで幅広い世代の21人。日本画の素材に初めて触れる人がほとんどです。ワークショップは、神戸さんの作品紹介と、日本画の素材についてのレクチャーから始まりました。レクチャーの後半では、実際に鉱石や膠（にかわ）を手に取って観察。参加者は素材の珍しさに目をみはり、とくに金箔を直接手にすると、あまりの薄さ、軽さに驚嘆の声をあげました。

レクチャーの後は、いよいよ制作です。神戸さんによるデモンストレーションをじっくり見て銀箔を貼る工程を理解してから、銀箔貼りに挑戦。銀箔はとても薄く、直接触ると手に貼りつくので、慎重に扱わなければなりません。今回は、和紙を張ったパネルに、ひとり5枚の銀箔を貼りました。まず、蝋が塗られた紙（あかし紙）を貼り付けて銀箔を持ち上げられるようにします。そして、接着剤の役割をする膠を引き、そっと、あかし紙に付けた銀箔をのせて、乾くのを待ちます。参加者は、初めてとは思えないほどきれいに貼ることができました。

銀箔を貼り終えたら、美術館の敷地内を散策して拾い集めた草花をモチーフに型紙をつくり、銀箔を加工しました。銀箔の上に型紙をのせて、硫黄を塗った紙をあててアイロンで熱を加えると、型紙がのっていない部分の銀箔が硫黄に反応し黒く変化します。参加者は、熱の加減や型紙の置き方に工夫を凝らしました。

最後に、出来上がった作品を発表しました。実際に銀箔を貼ってみた感想は、「難しかった」。けれども、きれいに仕上げることができた、硫黄で加工しておもしろい表情をつくることができたと、作品の仕上がりにはとても満足した様子でした。初めて触れた日本画の素材。その繊細さや美しさを感じながら制作し、心豊かな時間となったワークショップでした。



神戸智行氏

国立新美術館
インターンシップとサポート・スタッフ

平成24年度のインターンシップでは、展覧会、教育普及の2つの事業に分かれて8名のインターンが活動しています。展覧会事業ではカタログ制作や展覧会準備、教育普及事業ではワークショップの運営や鑑賞ガイド制作に関わるなど、幅広い活動を通して美術館の事業を学んでいます。一方、大学生と大学院生を対象にした登録制のボランティア制度であるサポート・スタッフは、今までで最多となる97名が登録し、美術を学ぶ学生に限らず、様々な分野を専攻する学生が活動しています。講演会やシンポジウム、ワークショップなどでの運営補助を中心に、美術館の事業を支える大きな力となっています。

公募団体等の活動　創玄展――第50回記念展に向けて

公益社団法人創玄書道会は、金子鷗亭（1906-2001）が昭和の初期に提唱した「近代詩文書」を中心とする現代書道の芸術運動に賛同した書家が集まった団体です。

それまで「書」は「漢字」「かな」の分野しかありませんでしたが、この近代詩文書運動は、現在私たちが使っている日本語で美しい言葉や感動を受けた言葉を用いて、もっと日常に密接した大衆の書を表現しようという運動です。金子鷗亭は日本の書檀の中でこの運動に情熱を捧げ、志同じくした書家と「随鷗社」を結成、その後昭和39年3月「創玄書道会」を創設、昭和40年、第1回「創玄展」を東京都美術館で開催しました。この運動が広がりを見せ単一団体としては最大級の団体へと成長し、昭和58年には社団法人として認可を受け、さらに平成24年1月「公益社団法人」に移行し、平成26年に開催予定の第50回「創玄展」に向け歩みだしました。

［金子鷗亭］

金子鷗亭は芸術全体を見据えて、現代書道を切り開いてきました。海外にも積極的に渡り東洋美術としての書の魅力を伝え、新しい息吹を感じる作品を発表してきました。また新聞社等のメディアと共に書道文化の普及に努め、「毎日書道展」の創設と発展に貢献しました。

生前、故郷である函館の「北海道立函館美術館」の建設に協力して、鷗亭が生涯をかけて集めた絵画、陶器、書画のほか、自身の代表作も寄贈し、国内では珍しい書道を本格的に扱う美術館となっています。困難な道であった近代詩文書の普及活動が認められ、平成2年文化勲章を受章しました。

［創玄展］

全国に在籍する約1,400名の正会員が「品格ある新鮮な感動を持った美しい書」を目指して、漢字・かな・詩文書・篆刻・刻字の部門で発表を行っています。国立新美術館を中心会場として、私たちの「今」の書道芸術を発信しています。本年来場者は約33,000人。会場内では「作品解説会」を20回以上行い、「書」の魅力を一般鑑賞者の方々に伝えています。また公募部門は毎年約8,000点の活気有る充実した作品が多く応募されます。審査により優秀な作品を展示し、受賞を重ねた者は正会員に推薦されます。

50年の歴史活動の中、金子鷗亭をはじめ大平山濤、佐々木寒湖、東地滄厓、明石春浦、金子卓義、吉田成堂等、多くの作家を輩出しており、現在も金子聴松、中野北溟、大井錦亭、関正人、内山玲子、石飛博光らが現代書道のリーダーとして活躍しています。

公募部門では「U23制度」を設け、若い世代の経費の負担を少なくして出品を奨励しています。今では800名余が出品し、新人の発掘という大きな役割を担っており、高齢化の見える書道界において特筆すべき点となっています。

作品解説会

［全国学生書道展］

創玄展の学生部門として小学校入学前の幼児から高校生までを対象として、全国より公募を行っています。少子化の中、約20,000点の応募があり毎年増加を見ています。子供たちに書道文化が親しまれ、育まれていくよう、努力の発表の場として大きな意義をもって開催しています。

全国学生書道展

［これからの50年］

「書道の普及振興に努めるとともに現代芸術としての書道の創造とその確立を図りわが国書道文化の発展に寄与することを目的とする」。この設立理念は創玄書道会創設時より変わらぬ姿勢として、正会員に浸透しています。

展覧会のみならず本会の主催する「夏期研究会」や「古典研究会」で研鑽を積み、それぞれが個展や文化活動にフィードバックします。

また、北海道松前町の「書のまちづくり」に協賛しており、平成20年金子鷗亭生誕100年記念事業として日本最大となる書の石碑群「金子鷗亭記念北鷗碑林」を建立しました。

東京目白の創玄会館内には「金子鷗亭記念ギャラリー」を設置、鷗亭の作品等を常設して開放しています。また書道文化振興を目的とする団体に「多目的ホール」を貸し出す等、立体的に書文化の支援に取り組んでいます。趣味の多様化、高齢化の昨今、多角的に書道に触れる機会を作っていく活動が、これからは重要となるでしょう。その中で国立新美術館での創玄展がさらに魅力的なものとなるよう、第50回記念展に取り組みたいと考えています。

（公益社団法人創玄書道会）

編集・発行：独立行政法人国立美術館　国立新美術館　〒106-8558　東京都港区六本木7-22-2　tel. 03-5777-8600（ハローダイヤル）　fax. 03-3405-2531　http://www.nact.jp/
表紙デザイン：佐藤可士和　制作：印象社　2012年8月31日発行